

「原因が分かるまで毎日来る。一緒に頑張ろう、絶対治る！」

——抗NMDA受容体抗体脳炎から蘇った若手女性記者の実話

映画・健康エッセイスト 小守 ケイ

「いつか1面を飾る記事を書きたい」。NYの春。夢だったNYポスト紙の記者になり、スティーヴンというミュージシャンの恋人も出来たスザンナ・キャラハン。今日は、離婚後にそれぞれ再婚した両親が祝ってくれる21歳の誕生日パーティーへ。恋人を紹介すると、父は「歌手の卵か」と不満げだが、皆で乾杯！その時、スザンナは突然、意識が遠のき、目の前の蠟燭の消し方も分らなくなる…。



風邪症状から数日で眩暈、手足の痺れ、幻覚、幻聴も

「風邪かも」。会社でも頭痛や咳、眩暈が起きるスザンナだが、デスクの「上院議員のインタビュー、頼むぞ！」に応えようと「頑張ります」。しかし、街でもフラつき車に衝突し、自宅では手足が痺れ、水漏れの幻聴も現れ、夜も眠れない。



「メ切、ミスるな!」。精密検査では異常ないが、スペルや文法を誤り、編集会議も忘れ、ついには上院議員のインタビュー

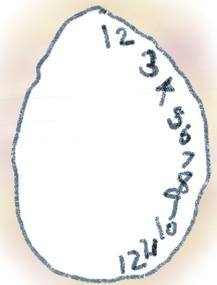
で卑猥な言葉を浴びせ、ぶち壊してしまう。また、翌週には急に泣き出すや、一転「私は幸せよ」と机の上に仁王立ち!

加えて、突然の激しい全身痙攣も起き、救急車騒ぎも。心配した父母が交代で引き取るが、「誘拐される」など幻覚や被害妄想で手に負えない。「あの子じゃない…」。

“半分の時計”は脳半球の損傷による視界偏りが原因

「原因不明。精神疾患だろう」。入院1ヶ月の頃、手足が硬直したスザンナは、スティーヴンが愛の歌を聞かせるも目の焦点が合わず、無反応。脳波やMRI、神経や血液にも異常なく、感染症も全て陰性のため転院を迫られる中、スティーヴンや父母の熱意に動かされた女医が、恩師の神経内科医ナジャーを訪ねる。「診て頂けませんか」。

「初めまして」。スザンナの病室。ナジャーは優しく話しかけ、3回目の診察で固まった手にペンを持たせて「時計の画を描いて」。彼女はざこちなく円を描き、その右半分に数字を書き入れた。すると翌朝、「脳の右半球に炎症が! 精神疾患ではない」。



そして、脳生検の結果から「抗NMDA受容体抗体脳炎です。治ります!」。母はナジャーに抱き付き、父は、廊下のベンチから見守り続けるスティーヴンを抱きしめた…。

映画の見所

「初めての2面記事、良いぞ!」。7ヶ月後、葉は続くも職場復帰したスザンナ。デスクの評価に頬を染めると、闘病記を勧められる。「人の役に立つなら…」。彼女は病気や周囲の愛を『脳に棲む魔物』に著し、ベストセラーに。それをオスカー女優C・セロンが映画化に動き、主演のC・G・モレッツも迫真の演技で応えた。女性達の病気啓発への想いに満ちた映画!



「彼女が目覚めるその日まで」
DVD 3,800円+税
発売元・販売元：
株式会社KADOKAWA
©2016 ON FIRE PRODUCTIONS INC.

精神病と誤診されていた若い女性の脳炎

【監修】公益財団法人結核予防会 理事
総合健診推進センター 所長 宮崎 滋

抗NMDA受容体抗体脳炎は、2007年に病態が解明されるまでは統合失調症や双極性障害など精神疾患と診断されていましたが、現在では、神経細胞膜上にあるNMDA受容体自己抗体による急性脳炎と判明しています。卵巣嚢腫を合併する若い女性に多いのは、卵巣嚢腫に関連する抗体がNMDA受容体に結合し、

神経細胞機能を低下させるためです。

発熱、頭痛などの風邪症状から10日ほどで無気力、抑うつや、携帯を使えないなど日常行動に支障が出る精神病期となり、続いて興奮、幻覚、妄想など統合失調症様症状が起こり、徐々に自発運動、発語が減る無反応期になります。進行すると不随意運動、痙攣発作を生じますが、MRI等で所見が乏しいのが特徴です。治療は卵巣嚢腫があれば摘出し、ステロイドや血漿交換療法を行い、数年で意識が回復することが多いとされています。

* NMDA (N-methyl-D-aspartate) : 神経伝達物質の1種。統合失調症の発症に関連。